

災害社会—何が問題なのか
京都大学防災研究所
地震予知研究センター
川崎一郎

今はどんな時代？
 食料資源の枯渇 化石燃料の枯渇 地球温暖化

2008/5/15 2

30年後に世界はどうなるの？

地球温暖化・中後進国の産業発展
 →一層の自然の荒廃・生態系の変化
 →食物の枯渇・疾病の蔓延
 →社会の荒廃→戦争？

2008/5/15 京都大学防災研究所川崎一郎 3

危機に瀕している人間社会

地球規模での自然破壊、環境汚染、新しい種類の感染症の頻発、慢性疾患の増大

今や、「**人間社会が持続すること**」が科学の基準になった。

2008/5/15 京都大学防災研究所 1992

日本の特殊事情

欧米先進国と異なる要素

格差社会、急激な人口減、
「農」と「林」の崩壊、巨大災害

2008/5/15 京都大学防災研究所川崎一郎

30年後に日本はどうなるの？

人口急減

→産業を維持するために農村人口の都市への吸収
 →農村・山村の消滅
 →産業の疲弊→円価値の下落
 →生活レベルの低下→社会の荒廃
 (→南海地震？)

巨大地震が来なくても、危機は深刻化している

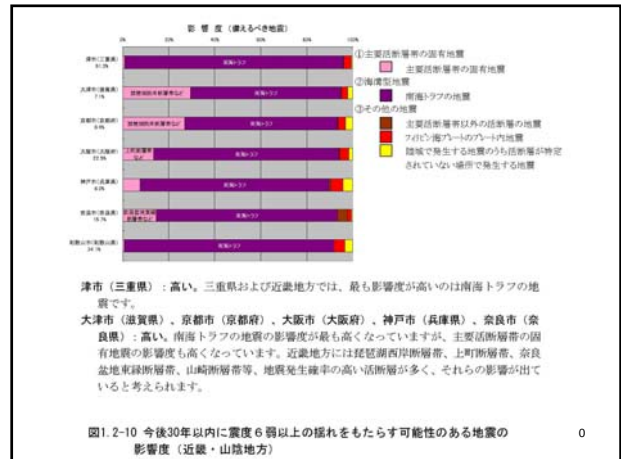
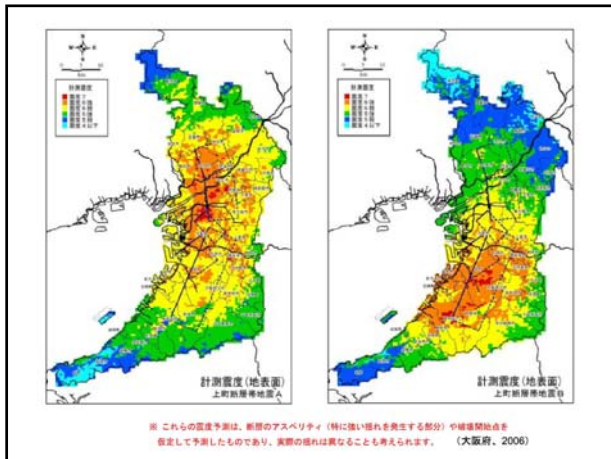
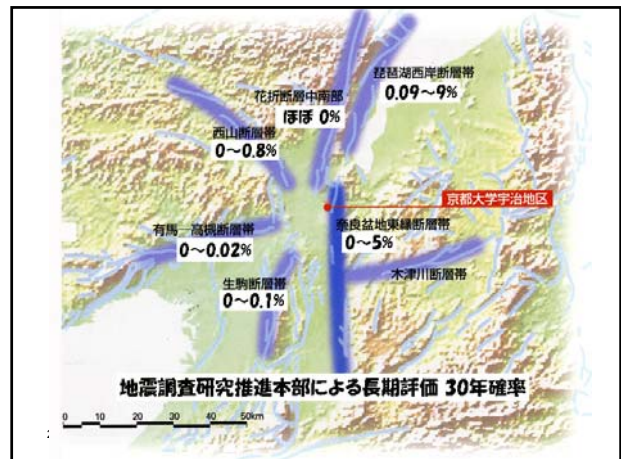
2008/5/15 京都大学防災研究所川崎一郎 6

研究者は、「純粋に科学の研究のみに目を向けている」という教育を受けてきたので、困難。
ジャーナリズムの積極的な共同作業が必要。

2008/5/15

京都大学防災研究所川崎一郎

7



養老断層、鈴鹿西縁断層、琵琶湖西岸断層など活動的な活断層が存在する。
しかし、発生確率を考えれば、20年から30年後に起こるプレート境界型の南海地震・東南海地震を仮想敵とした方が現実的。

2008/5/15

京都大学防災研究所川崎一郎

11

死者2万人想定

スーパー広域災害
救援はなかなか来ない。
大量の路上生活者が出る。
大量の餓死と疫病死がでる。

経済損失56兆円

政府の防災会議

新川崎一郎

新川崎一郎

12

「阪神淡路大震災モード」から
「南海地震モード」へ

「阪神淡路大震災モード」
＝数日または援助が来る。数週間までは仮設住宅。

「南海地震モード」
＝被災者は100万人のオーダー。
数週間まっても援助が来ない。大量の路上生活者。

ただし、防災対策は、大局的には共通

2008/5/15 京都大学防災研究所川崎一郎 13

何が最大の弱点？

戦後から高度成長期に大量に作られた
「細い組木とモルタル壁の住宅と、道の狭い住宅地」

東京だと環7と環8周辺、大阪だと東大阪市、大東市

2008/5/15 京都大学防災研究所川崎一郎 14

大阪市と近郊の人口の変遷 (人口は各市役所のホームページによる)

	大阪市	東大阪市	枚方市	羽曳野市	宇治市	生駒市
昭和20年(1945)	1,559,310*	211,665*			31,740	21,702
昭和25年(1950)	1,956,136	230,861	44,640		38,231	21,129
昭和30年(1955)	2,547,316	263,136	58,906		40,061	21,649
昭和35年(1960)	3,011,563	318,001	79,668	39,642	47,336	23,138
昭和40年(1965)	3,156,222	443,081	129,291	50,927	68,934	28,511
昭和45年(1970)	2,980,487	500,173	219,759	75,864	103,497	35,550
昭和50年(1975)	2,778,987	524,750	299,563	94,045	133,405	48,849
昭和55年(1980)	2,648,180	521,558	355,457	103,390	152,692	70,461
昭和60年(1985)	2,636,249	522,805	379,751	111,693	165,411	86,293
平成02年(1990)	2,623,801	518,319	389,326	115,489	177,010	99,604
平成07年(1995)	2,602,421	517,232	397,841	118,586	184,830	106,726
平成12年(2000)	2,598,774	515,094	401,714	120,980	189,112	112,830
平成17年(2005)	2,628,811	511,616	404,134	120,736	189,591	113,724

□ は人口急増期

2008/5/15 京都大学防災研究所川崎一郎 16

地球温暖化に強い社会構造
食物の枯渇に対応できる社会構造
巨大自然災害に打たれ強い社会構造

2008/5/15 京都大学防災研究所川崎一郎 16

格差社会＝災害に弱い社会
社会的弱者 低所得者には
防災対策などするは余裕はない

→
年収300万円以下で生活しているひと
には、耐震改修は難しい。

安い食品に飛びついても無理はない。

すべては格差社会に行き着くのでは？
社会の在り方を問うことでは？

2008/5/15 京都大学防災研究所川崎一郎 17

2003年7月夏
世界で異常気象 欧州大熱波
46,000年に一度の現象
Schar et al.(2004)

FIG. 3-1 DISTRIBUTION OF UNUSUAL MONTHLY CLIMATE (JUL.2003)
図2-1 異常気象発生地域分布図(2003年 7月)

日本: 異常低温
ヨーロッパ: 異常高温

2008/5/15 京都大学防災研究所川崎一郎 18

今後、数100年に1度、数1000年に1度という
災害が繰り返す？


100年に1度の災害を想定して、そこにパッチを当てていく
ような防災対策では間に合わないのでは。

2008/5/15 京都大学防災研究所川崎一郎 19

100万の被災者への大量の食料の継続的提供
復興のための大量の木材の継続的提供

山陽、山陰、北陸、信州

2008/5/15 京都大学防災研究所川崎一郎 20




大江正章 Oe Hisaomi
地域の力
食・農・まちづくり

岩波新書 1115

もっとも本質的な災害対策
自給を中心にすえた複合経営
→農村・山村の活性化

災研究所川崎一郎 21

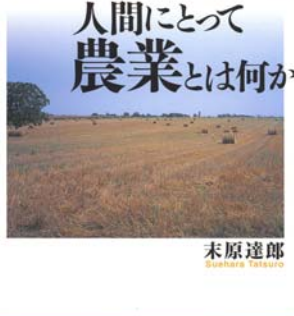
地球温暖化も、
食糧資源の枯渇も、
地震防災も
一つの枠組みで



百弘之著
地球環境報告 II

岩波新書 592

2008/5/15 京都大学防災研究所川崎一郎



**人間にとって
農業とは何か**

末原達郎
Suahara Tetsuro

地球の農業を知るために、
私たちの食料を考えるために

人間は自然の中で農業を生みだし、作物や家畜を育て、食料としてきた。単独経済化によって見失った米の道徳を、アフリカ、ヨーロッパ、日本の農業を取り上げて見つめなおす。

川崎一郎 23

アフリカや南アメリカ
換金作物の輸出
主食用穀物の輸入

植民地体制の遺産
現在は経済的な
貿易関係の中で維持
**国際分業論？
グローバルゼーション？**